

釋

方 丈 記

大阪大學教授
宇佐美喜三八著

文 進 堂

都内定価 100 円

地方定価 105 円

昭和 27 年 2 月 5 日印刷

昭和 27 年 2 月 10 日發行

著 者 宇 佐 美 喜 三 八

大 阪 市 南 區 横 堀 7 ノ 19

發 行 者 前 田 勘 次

大 阪 市 南 區 横 堀 7 ノ 19

印 刷 所 文 進 堂 印 刷 部

大 阪 市 南 區 横 堀 7 ノ 19

東 京 都 千 代 田 区 神 田 小 川 町 3 ノ 10

發 行 所 文 進 堂

振 替 大 阪 112730 番

電 話 船 場 (25) 1990 番

序

本書は、方丈記の全篇に解釋をほどこしたものである。口譯は出来るだけ原文に忠實であることを期し、語釋は能ふかぎり詳細に記しておいた。方丈記もまた各種學校で教材に用ひられるやうであるから、その点も充分に考慮して書いたつもりである。

原文は、大福光寺本と流布版本との特色を兼ね具へた扶桑拾葉集本の本文を底本とし、明かに誤記と認められる字句を訂正し、底本に施されてゐる校合に見られる異本の字句と、大福光寺本、嵯峨本などの本文とを參照して校訂をほどこした。

校訂を加へた字句は、本文の終りにこれを註記した。(イ)とあるのは底本に於いて校合に用ひられてゐる異本を(大)は大福光寺本を、(嵯)は嵯峨本をさしてゐる。註記の法は、例へば「かぞへ(イ)——かずへ」とあるの、本文に「かぞへ」とある語は、底本に「かずへ」となつてゐるのを、異本に從つて改めたといふ意味である。なほ諸本間の字句の重大な違ひは、語釋の中で述べておいたものもあり、參考として別に附記した所もある。

附録として、方丈記の本文を読むのに參考となるべき文献を載せておいた。これらを參照して方丈記に對する理解を深めていただければ幸である。

方丈記新講

二

方丈記の註釋や研究は、江戸時代以後現在まで極めて多くのものが出てゐる。もとより私はそれらをあまねく渉獵したわけではなく、乏しい材料によつてこの本を書いたが、直接間接それら先進の業績に負ふ所は少くない。ここに感謝する次第である。

昭和二十三年二月

著者

解題

目次

一 行く川のながれ

行く川のながれは絶えずして……………一

玉しきの都のうちに……………三

知らず、生れ死ぬる人……………五

二 安元の大火

予、物の心を知れしより……………七

去ぬる安元三年……………八

吹きまよふ風に……………一

或は煙にむせびて……………一三

このたび公卿の家……………一四

三 治承の辻風

又治承四年卯月廿九日のころ……………一五

家の損亡せるのみならず……………一八

四 都 う つ り

又おなじ年の水無月のころ……………一九
されど、とかくいふかひなくて……………二〇
軒をあらそひし人のすまひ……………二二
その時おのづから事のたよりありて……………二四
日々にこぼち、川もせに……………二五
これは世の乱るる瑞相とか……………二七
ほのかに傳へ聞く……………二九

五 養 和 の 飢 饉

又養和の頃かとよ……………三一
京のならひ、なにわざにつけても……………三三
前の年、かくのごとく……………三四
かくわびしれたる者ども……………三六
あやしきしづ山がつも……………三七
又いとあはれなることも侍りき……………四〇
仁和寺に隆曉法印といふ人……………四一
近くは崇徳院の御位の時……………四三

六 元 暦 の 地 震

また元暦二年の頃……………四四

都のほとりには……………	四五
その中に、ある武士のひとり子の……………	四七
かくおびただしくふる事は……………	四八
四大種の中に……………	五〇
七、 ありにくき世……………	五一

すべて世のありにくきこと……………	五二
もしおのづから身かずならずして……………	五三
もし貧しくして……………	五五
もしせばき地に居れば……………	五五
又いきほひあるものは……………	五五

八 出 家

わが身、父方の祖母の家を傳へて……………	五七
これをありしすまひにならずらふるに……………	五九
すべてあらぬ世を念じ過しつゝ……………	六一

九 末葉のやどり

ここに六十の露消えがたに及びて……………	六三
とかくいふ程に、齡は……………	六四

一〇 方丈の庵室

いま日野山の奥に……………六五

一一 日野山の閑居

その所のさまをいはば……………六九

春は藤波を見る……………七一

もし念佛ものうく……………七二

もし跡のしら波に……………七四

また簾に一つの庵あり……………七六

或はつばなをぬき……………七七

あゆみ煩ひなく……………七九

もし夜しづかなれば……………八一

一二 閑居の氣味

大かた此のところに……………八三

程せばしといへども……………八五

すべて世の人のすみかを作るならひ……………八六

それ人の友たる者は……………八七

いかが我が身を奴婢とするとならば……………八九

今一身を分ちて……………九〇

衣食のたぐひまた同じ……………九二

一三 一期の樂しみ

大かた世をのがれ……………九三

それ三界はただ心一つなり……………九五

一四 しづかなる曉

そもそも一期の月影かたぶきて……………九七

しづかなる曉……………九八

附 錄

鴨長明(十訓抄)……………一〇二

池亭記(慶滋保胤)……………一〇三

内裏炎上(平家物語)……………一〇六

京中焼失(源平盛衰記)……………一〇七

つじ風(平家物語)……………一〇八

都 遷(平家物語)……………一〇九

新 都(平家物語)……………一一一

天下餓死(源平盛衰記)……………一二二

大地震(平家物語)……………一二三

解題

二 鴨長明の生涯

鴨長明は下鴨神社の禰宜鴨長繼の子として生れた。建保四年に六十二歳で歿したとする説に従ふと、呱呱の聲をあげたのは崇徳天皇の久壽二年（西暦一一五五）である。母は明らかでない。父祖は世々賀茂の社の禰宜であつた。一人の兄があつて、長守といつたが、經歷は不明である。應保元年十月十七日、七歳の時、中宮叙爵によつて従五位下になつてゐる。この頃から、菊大夫（或は南大夫）と呼ばれたらしい。若年の頃に孤兒となつて、父方の祖母の家をうけついだ。長明が生れて間もなく二歳の時には保元の亂が起り、五歳の時には平治の亂があつた。十二歳の時には平清盛が太政大臣となつた。彼はかうした新舊文化の交替する、あわただしい混亂の時代に成人したのである。

頼朝が東國に兵を擧げ、後數年ならずして平氏が滅んだのは、長明が三十一歳の時であつた。それまでに彼は安元の大火、治承の大風、福原遷都、養和の飢饉、元暦の大地震などの異變にあうてゐる。受け繼いでゐた父方の祖母の家を去り、鴨河原に近い所に草庵を結んで移つたのも三十歳の頃である。轉變の甚しい世相といひ、~~祖~~天災地變といひ、いづれもその時代の人々に無常の念を抱かせたに相違ない。長明もまた世の~~盛衰~~を痛感したのである。

長明は和歌と管絃の道に達してゐた。和歌は俊惠の弟子で、平家の滅亡後、文治三年に撰進された千載和歌集には一首入つた。當時彼は三十三歳で、「一首にてもいれるはいみじき面目なり」(無名抄)と喜んだ。琵琶はその得意とする所で、方丈記の中にも琵琶を弾くことが記されてゐるが、文机談によれば、かつて師傳を経てゐない啄木の曲を弾いたことが物議をかもし、しばらく伊勢の二見に蟄居したと傳へられる。彼が伊勢におもむいたのは文治二年秋で、三十二歳の時である。正治二年九月、後鳥羽院歌合の時、彼は歌の達人たるを以て特に招き召され、建仁元年和歌所が創設されて間もなく寄人に加へられた。四十六歳の時である。さうして、和歌の會あるごとに詠進し、歌の道で世に用ゐられて、得意な時代がしばらく續いた。

長明が出家したのは、五十歳の頃である。その原因については異傳もあるが、家長日記や十訓抄にいふ如く、社司を望んで得られなかつたのが、その契機となつたのであらう。下鴨神社の禰宜に歛員が生じ、彼はこれに補せられんことを望んだ。しかるに、同族の祐兼が子の祐頼を推したので、長明の望みはかなはなかつたのである。——すべてあらぬ世を念じ過しつつ、心をなやませること三十餘年なり。その間、をりをりのたがひめに、おのづからみじかき運をさとるぬ。すなはち五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。——と方丈記の中でのべてゐる。出家をして彼は法號を蓮胤と稱した。最初は大原山を隠棲地としたが、そこで五年を送つて、日野山に移つたのであつた。

日野の外山に結んだ方丈の庵の有様や、そこで營んだ簡素な閑居生活などについては、方丈記の後半に具さに記されてゐる。建曆元年秋には鎌倉に下向した。藤原雅經の推舉により將軍實朝に會ふためであつた。度々實朝に謁したことが、吾妻鏡に記されてゐる。當時實朝は二十歳で、長明を招いて

歌道に關する話を聞いたのであらうと思はれる。賴朝の命日には法華堂に參詣して歌を詠んでゐる。それから再び草庵に歸り、方丈記の筆を執つたのである。方丈記の末尾には、「時に建曆の二年、三月の晦日頃、桑門の蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす」と書かれてゐる。それから四年ほど生き延びて、順徳天皇の御代、建保四年に歿した。時に六十二歳であつた。但し、この享年については異説もある。

長明の著述としては、方丈記の他に、伊勢記・無名抄・發心集・鴨長明集等がある。四季物語・瑩玉集・文字鎖・長明寢覺物語・夢遊集なども長明の著述であると傳へるが、これらは長明の作として疑はしいものであるか、或は全然後人の僞作と見るべきものである。

彼の歌で勅撰和歌集に入つてゐるものは、千載集に一首、新古今集に十首あるのを始めとして、續古今集以下に一首或は二首あつて、總計二十五首である。

二 方丈記の傳本について

方丈記の傳本は大きく分類すると、流布本と異本との二つの系統があつて、この兩者は組織が頗る相違してゐる。

流布本系統のもので現存する最古のものは、京都府船井郡高原村の大福光寺に藏する古寫本で、國寶に指定せられ、複製刊行されてゐる。卷末に「右一卷者鴨長明自筆也、從西南院相傳之、寛元二年二月日親快證之」といふ奥書がある。親快は當時の醍醐寺の僧で、この識語が果して親快の自署なりや否や疑を存すべき點があり、またこれを長明の自筆とするのも不當であるが、長明の時代を遠く距

つてゐない頃に書寫された事實は、紙質や書體の上から見て疑ふべからざるものとされてをり、方丈記の原形を知る上に貴重な資料である。なほ古寫本には、前田家に傳はるもの、舊九條家所藏で現在佐々木博士の藏となつてゐる慶長十九年の寫本、又、吉澤博士所藏の古寫本などがあつて、これらは木版で刊行された流布本に對して、大福光寺本系統といふべき本文をもつてゐる。

流布本系統のもので最も流布したものは、江戸時代に木版により刊行せられた本で、その本文は大體に於いて慶長年間に刊行せられた嵯峨本の本文の流を引いてゐる。木版本系統の流布本の本文には字句の使用の上でなほ批評を加ふべき個所がかなりにあり、この點に於いて、大福光寺本系統の本文は遙かに優れてゐるのである。

大福光寺本系統の本文と、木版本系統の流布本の本文とを對照すると、その大きな相違は、大福光寺本系統の本文には、大地震の記事の中に「その中にある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、（中略）……………子のかなしみには、たけき者も恥を忘れけりと覺えて、いとほしくことわりかなとぞ見侍りし」の一節がなく、また閑居の樂みをのべた所に「おほかた世を遁れ、身を捨てしより、（中略）……………生涯の望みは、をりをりの美景にのこれり」の一節がない。更にまた木版本系統の本文には、卷末に、「月かげは入る山の端もつらかりき、たえぬ光を見るよしもがな」の一首がある。然し、この「月かげは」の歌は新勅撰集にある源季廣の歌で、後人が記入したものと見られ、無い方が正しいと考へられる。（前田家の古寫本には、卷末二枚ばかりの白紙を置いて空也和讃の一節が記されてゐるが、方丈記を讀んで無常を觀じた人が記したものと云はれてゐる「月かげは」の歌も同様と解すべきであらう）。

總括的に流布本と呼ぶ中には、このやうに大福光寺本系統のものと。木版本系統のものが考へられるが、この兩者の中間に位する本文をもつものに、徳川光圀の編集した扶桑拾葉集卷十所収の方丈記がある。また羣書類従の雜部三十五所収の本は版本と拾葉集本とを折衷した如きものである。

次に異本の系統のものでは、水戸彰考館本・東大國語研究室藏本・故森治藏氏藏本などが知られてゐるが、この系統のものには（一）延徳二年肖柏の奥書ある本（二）長享二年佛子英源（一本奠源）の奥書ある本、（三）上記二本の特徴を具へてゐない簡略な本、この三種があつて、（三）（一）（二）の順に出來たといはてゐる。異本は流布本に比して頗る内容が貧弱粗雑であつて、文章もまた拙劣で、文學的な價值は殆んど認めることが出來ない。流布本では、前半に人生の無常を説いてそれを實證する五大災厄をあげ、後半に作者の閱歷を記して閑居生活を述べ、全篇十四段が秩序整然と書かれてゐるのに對し、異本の方には、災厄の記事はなく、佛詣散策や閑居の氣味の前半に相當する所もない。草庵の記事や流布本の末段に當る所はあつても、文章には甚しく相違がある。

かうした兩者の大きな相違から、流布本と異本との前後關係は當然問題となり、また方丈記の僞作説も生じた。故藤岡作太郎博士は、その遺稿、鎌倉室町時代文學史の中において、流布本方丈記には平家物語、源平盛衰記、山家集などの他書と類似の個所が相次ぐを以て、恐らく後人が諸書の一部を取つて綴り上げた僞書で「長明の作にはあらざるべしと信ず。」と述べ、異本については、「この方は長明の作にあらじと斷言する能はず」と言はれた。また野村八良博士は、その著、鎌倉時代文學新論の中で、流布本方丈記の結構並びに文辭が、全く慶滋保胤の池亭記の模倣であることを論じ、「一、長明に果して方丈記の作ありたらんには、そは今の流布本の如きものには非ざるべし。二、流布本方

丈記は後人の僞作なるべし。(而も内容形式ともに鎌倉時代文學の特色を帶ぶるは否定すべからず。)
といふ結論に達せられ、「若し夫れ、異本の方に至りては如何と云ふに、長明に果して方丈記の作ありとせば、原作に近きものかと思はれざるに非ざれど、これはた鎌倉時代の奥書などの存する古本の出現せざる限、今日眞僞を斷する能はず。假に此の異本を信じて長明を評せば、長明は思想家文章家として偉大なる人にあらざる事となるなり。」と述べられた。それ以後、方丈記について論ずる人の中には、流布本僞作説を唱へたり、異本から流布本が出來たことを推測する人もあつたが、山田孝雄博士が「平家物語につきての研究前篇」で、平家物語と方丈記とを詳細に比較せられて、寧ろ平家物語が方丈記に倣つたものであることを判定され、また岩波文庫の方丈記解題において大福光寺本を紹介せられて僞作説の非なることを論駁せられてゐるのを見て明かな如く、今日の學問的な立場から僞作説は信じ難いものである。異本について、山田博士は、「かの平家物語の大祕事に該當すべき平家物語補闕と名づくる書にて見る如く、南北朝以後往々古書の得がたき場合に何人か之に擬作して、以て自ら得々たる如き弊を見るものなれば、それらの異本も亦、これらの亞流ならずとは必せざるなり。」と述べてをられる。

我々は流布本の方丈記を鴨長明の作と認めて差支へないのである。流布本の中で、大福光寺本は書寫の年代も古く信頼すべきものではあるが、しかしこの本の本文が絶對唯一のものとすることも出來ない。書寫による誤脱と認むべきものは、この本にも存する。また、假りにそれが長明自筆の本であつたとしても、他に長明が書いた本があつたことも考へられ、成稿の後、作者が字句に推敲を加へたことによつて、すでに作者の手許に於いて、部分的に字句の異なる本が存したことも考へられる。さう

たことは、古典文學の成立を考へる時、臆説といふことも出来ないものである。書物が印刷せられずに、書寫によつて傳へられた時代では、草稿本と清書本とがある場合、それがすでに異本發生の端緒となるのである。

三 方 文 記 の 内 容

方文記の内容は大きく二つに分けると、人生の無常を説いて五大災厄を述べた部分と、自己の閱歷を語つて隱遁生活を述べた部分より成るのであるが、全篇の組織は整然としてゐて、これを丁四段に分けて見ることが出来る。その前半は七段より成る。

- 一 行く川のながれは……夕を待つことなし。
- 二 予物の心を……すぐれてあぢきなくぞ待るべき。
- 三 又治承四年……さとしかなとぞ疑ひ待りし。
- 四 又おなじ年の……昔になすらひて知りぬべし。
- 五 又養和の頃かとよ……悲しかりし重なり。
- 六 また元暦二年の頃……いひ出づるのだになし。
- 七 すべて世の……心をなくさむべき。

第一段は總論で先づ人生の無常を説き、「あるじ」と「すみか」とのはかないことを語つてゐる。第二段以下にそれを實證すべき體験を語つてゐる。即ち、第二段は大火、第三段は大風、第四段は遷都、第五段は飢饉と疫病、第六段は地震をのべ、人と家とがもろくはかないものであるといふ實感を具體的なものに表はしてゐるのである。第七段は以上の結論として第一段に照應させて「我が身」と「す